

「須磨事件」というのは、私たち三姉妹の家族の間では有名な話で、私が小学校3年生の夏休みに、子ども達だけで「海水浴」へ行ってしまった、という出来事です。

以前、「私たち一家は九州の炭鉱町から神戸へ引っ越してきた」と書きましたが、それから2年ほど後のことです。共働きの若い夫婦にとっては、慣れない土地で、子ども3人を抱えて生活するのに大変だったのでしょう。子どもはそんな親の状況など、まったく分かりません。姉は夏休みなのに、なかなか海へ連れて行ってくれない親に業を煮やし、黙って妹の私たちを連れて、自宅からJRの駅で6つ離れた「須磨の海水浴場」へ出かけてしまったのです。

親に黙って来てしまったことが後ろめたいのか、海で泳いでいても、姉は時々、「お父さんに叱られるから、仕事から帰って来るまでに家へ帰るよ。」と、忘れずに念を押すのです。その度に、姉の不安そうな雰囲気を感じて、「お姉ちゃん、大丈夫？」と思ったのを、覚えています。それだけではなく、その後、もっと大変なことが起こりました。いざ「帰る」という時（昼の1時過ぎ）に、「帰りの電車代がないから歩いて帰る。」と、妹たちに白状なのです。出かける際、海へ行ってしまえば「後は何とかなる」と姉は思っていたようで、子どもながらにそれを実行してしまったのです。

結婚後、「その時、お母さんはどうしていたの？」と、母に何気なく聞いた事があります。須磨事件の前日、姉は母に「海水浴へ連れて行って」「お小遣いちょうだい」とせがんでいたそうです。晩御飯になっても帰らない子どもを心配した母は「まさか」と思いながらも、「子ども達だけで泳ぎに行った？」「3人とも海でおぼれ死んでしまった？」という悪い想像に半狂乱となり、真っ暗な夜の海岸を探し歩いたと言います。周りの人が引き止めなければ、自分も死んでいたと、後にも先にもその一度きりもらしました。その時初めて、私たちの行く末を母が心配するのは仕方がないほどの「大事件」を起こしたのだと、心から後悔しました。

姉が亡くなった後、私が妹に「私はお姉ちゃんに『疲れた。お腹が空いた。』と文句を言い、あんたはのん気に背中であまりこけてるし。お姉ちゃんは『文句を言わない。いつまでも負ぶさってないで起きなさい。』と、言いながらも最後まで私らの手を放さんかったんよ。」と言うと、「今まで、須磨の話は何回もしてきたけど、そんな話、初めて聞いたわ。」と、妹は驚いていました。「あの時、お姉ちゃん、私らをほって（捨てて）行っても文句を言われる年じゃなかったのに、よくぞ



須磨・泰山寺の桜の下で姉(右)と一緒に

連れ帰ってくれたと思わへん？ほって行かれてたら、その後の私たちって、また違った姉妹関係になったんやろね。」との問いかけに、妹はぽつんと、「ほんまに、そうやね。」と答えるだけでした。

その姉の手は、亡くなるその日まで、どんなに遠く離れていても、私たち家族に差し伸べられ、私たちがその手を握り返しさえすればその時はいつでも、力強く包んで握り続けてくれました。姉の存在は、良いも悪いも私の道しるべであり、また、子ども達の理解者であろうとしました。

それは、私たち夫婦の「親商売、やめたいと言ってもやめられない。どんな時にも、親が子どもの手を放してはいけない。」という思いと、まったく同じものでした。

今年3月、姉：小椋尊子が他界しました。
このエッセイを姉に捧げます。

松本 康子
まつもと やすこ

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人となった。このコラムでは、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私と子どもの悪戦苦闘の姿を紹介。



読者のお母さん方、お待たせしました。皆さんにご好評の康子さんのエッセイの1年ぶりの復活です。

康子さんの30年余りのアメリカ生活で、太平洋を挟んでの離ればなれの生活でしたが、時折のお互いの訪問で姉妹の絆はより強くなりました。そのお姉さんの看病のために、康子さんはほぼ1年間を日本で過ごしました。

看病の間の二人の話題が、お互いの子ども達のことになるのは当然です。お姉さんから日本での子育て・教育の話聞き、自分自身のアメリカでの教育をもう一度振り返る機会が多かったようです。そんなエッセイの始まりです。

今回は、お姉さんとの思い出を振り返り、子育てでの家族・兄弟姉妹の絆の大切さを訴えているエッセイでした。

小椋尊子さんのご冥福を、心から祈ります。